**民俗学から見た高齢者福祉の新たな可能性**

　　　　　　　　　　　　　～**六車由実氏へのインタビューを踏まえて**

薗田碩哉

**１　「介護民俗学」という驚き**

　2012年に六車由実『驚きの介護民俗学』が刊行されたとき、われわれはこのユニークなタイトルに新鮮な驚きを覚えた。「介護」と「民俗学」？　この２つの用語は水と油ほどではないにしても、かなりかけ離れていて、いったいこれがどう結びつくのか疑問を感じたからである。しかし、この本を読み進めていくうちに、老人ホームやデイサービスに代表される介護現場とは、短くない人生を生き抜いて時代と切り結んできた高齢者の集まる場として、著者の言うようにまさしく「民俗学の宝庫」に他ならないことが納得できたのであった。まさしく目からうろこが落ちるとはこういう体験を言うのであろう。

老人ホームにやって来た高齢者は、20世紀の前半からのこの国の転変を身を以って生きてきた人たちである。昭和前期、戦争に向かってのめり込んでいく時代、戦争が始まってからの苦難や悲惨な体験、そして焼け跡闇市の戦後、復興から経済成長、バブル経済がはじけとんだ後の失われた10年、20年――こうした時代背景を共有しながら、ひとりひとりの人生はそれぞれ独自で個性的なものである。一人として全く同じ生き方はしていない。高齢者が昔を思い出して語る話に「とことんつきあい、とことん記録」することによって身体に刻み込まれた記憶がよみがえる。高齢者の言葉を言葉通りに理解し、高齢者が生きてきた物語世界をともに体験する―それは語り手にとっては自分の人生を見つめなおすことのできる貴重な機会になるとともに、聞き取りをし、その内容をまとめて文章にしていく聞き手の行為は、そのまま六車氏が民俗学者として行ってきた研究実践そのものである。

六車氏のこの本を読んで、福祉の研究者をもって任じていた私たちは、ほとんどコペルニクス的転換とも言いうるような発想の転換を迫られる思いがした。高齢者福祉の実践とは、高齢者を対象にその福祉の増進を考え、適切な支援方法を組み立てていくことだと、いとも当然に考えてきたのだが、それはもしかしたらとんでもない見当違いなのでは、という疑問が頭をもたげてきたのである。高齢者は豊かな体験や知識を蓄積している生活の主体者なのであって単なる支援の客体ではない。むしろ高齢者の持っている多様な宝を掘り出し、しっかり受け止めることこそが高齢者福祉の本来のあり方ではないか、と。

当時、福祉文化学会研究委員会は「よもやまゼミ」と名づけた研究活動を展開して、福祉文化研究の発想転換を模索していた。その背景となった事情は、近年の「福祉文化」研究が「福祉文化とは何ぞや」という定義づけの問題に拘泥し、しかも「福祉文化」を文化的に優れた福祉実践という方向に理想化して捉える傾向が強かったことである。それに対して、必ずしも文化的に豊かとは言えない福祉現場の現実に寄り添い、文化的な視点から（ゼミでの言い方を借りれば「文化のメガネを掛けて」）その状況を批判的に考察することこそ福祉文化研究の課題ではないかと「よもやまゼミ」は考えた。「福祉文化研究」とは、「福祉文化」の研究ではなく、福祉の「文化研究」であるというのがその端的な結論だった。

この視点から見ると六車氏の『介護民俗学』はまさしく私たちが具体化しようとしていた「福祉の文化批判」の格好の実践だった。とくに六車氏が「回想法」に対して投げかけた疑問は、私たちを深く考えさせるものだった。回想法は高齢者に昔語りをさせることで高齢者の元気を取り戻し、介護予防に役立てようというねらいで作られたプログラムで、現場で取り入れるところも増えてきている。六車氏も当初、高齢者の話を聞き取るということで回想法に親近感を持って勉強会に出かけたりもしている。しかし、そこで行われている回想法の進め方に六車氏は大きな違和感を持った。

回想法では話を聞くに当たって「メモを取ってはいけない」というのが鉄則だという。相手の目を見てしっかりと聞く「傾聴」が大切なので、メモを取られたりしては話しにくくなるというわけだ。また、話のテーマが設定されていて「テーマから外れてはいけない」とされる。自由に、気ままに語ることは良しとされない。そして効果測定のために「高齢者の行動を評価する」ことが求められている。回想法は結局、回想するというプロセスにのみ注目して、回想されたコンテンツは無視している。そこには高齢者を支援対象として効果的に操作するという視点があるばかりで、高齢者から教えを受けるという発想は微塵も見られない。支援施設における「福祉文化」は、支援者主導のパターナリズムに支配され、また医療文化の影響下で「治療」に傾斜している。この実態を批判的に考察し、新たな道を見つけ出すのが福祉文化研究の課題ではないか―私たちはそう考えた。

**２　「関係性」を軸として…六車由実氏インタビュー**

　私たちは六車氏の話を直接に伺ってみたいと願っていた。なかなか機会を得られないまま時間が経過したが、ようやく2017年の暮れも押し詰まった一日、福祉文化学会の研究グループは、念願の六車氏の活動現場を訪れる機会を持つことができた。静岡県沼津市にあるデイサービス「すまいるほーむ」である。沼津駅から海岸沿いに西へ進んだ住宅街の一角、建物は大きめの民家を利用したもので、「施設」らしくないアットホームな雰囲気である。集まった10人ほどの高齢者に私たちも一緒に加わって「カルタ」が始まった。カルタと言っても出来合いのものではなく「すまいる」のオリジナルである。読み札には「すまいる」にやってくるメンバーから取材したちょっとしたエピソードが書かれている。六車さんがこれを読み上げると、その人の小さな物語がみんなに共有されるというわけだ。大きくかな文字を書いた取り札は、読み札の冒頭の言葉ではなく、その中に出てくるキーワードから取られている。つまりは読み札を最後まで聞いてからでないと、どの文字を取ればいいのかは分からない。こうして誰も安心して最後まで読み札の物語を味わうことができる。実際カルタが進むうちに、このデイサービスはどんな人がいて、どんな体験をしてきた人なのかがいとも自然に分かってしまう。

「すまいるかるた」を楽しんだ後、六車さんにインタビューすることができた。一問一答は多岐にわたったが、その要点は以下のとおり。

●「聴き取り」を土台に多彩な展開

――民俗学の研究者からなぜ介護の世界に移られたのでしょうか？

六車：研究者・教員として地域とのつながりもあって充実はしていたのですが、地方大学の状況は過酷で学生と向き合う時間がない、業績も求められる。追い詰められて大学はいったん辞めようと思って沼津に戻ってきました。介護の世界に入ったのは半ば偶然で、ハローワークに行って、たまたまホームヘルパー２級の講座を見つけて受講しました。福祉の仕事をしたかったというより、民俗学をやって来たのでお年寄りと関わる仕事がしたかったということです。聞き書きをするにしても、介護の資格が役に立つと思いました。最初はできるかどうか心配でしたが、意外に介護は自分に向いていたという感じです。

――介護の現場に入られて違和感を持たれたのはどんなことでしたか？

六車：利用者とスタッフの関係性ということですね。民俗学のやり方では、聞き書きを作るために村に入るときは、「聞かせてもらう」というスタンスです。まずは信頼関係が大事です。民俗学は人と人との関係性で成り立っているのに、福祉の世界にはそれがないんじゃないかと感じたのです。高齢者のみなさんは実のところいろんなことを話したいのに、高齢者の話をちゃんと聞き取る人がいない。これはこれまで関わってきた高齢者との関係性ではない。介護する―介護されるという関係性なんです。自分が高齢者になったときにはこうなりたくないと思いました。

――介護現場での「聞き取り」はどんな風に進めて来られたのですか？

六車：民俗学の研究者として聞き書きをずっとしていたときには現に介護を受けている人に出会うことはなかったんです。老人ホームに来て見たら、そこにはたくさんの歴史の証人がいて話を聞かせてくれる。聞かないわけにはいかない。実際やり始めると、実にことば豊かに語ってくれる。これは大発見でした。そこで１対１の聞き書きから始めました。聞き書きをまとめて、それをご本人に渡していたんです。

しかし、デイサービスに移ってからは、聞き書きを１対１でやることは物理的に難しくなりました。そこでみんなの前で話を聞くことにしたんです。聞いている周りが質問したり別の話が展開したり、お互いが響き合う。ひとりの人の人生がみんなに共有されていく。つながっていくんですね。そして聞きっぱなしではもったいない、ということで、まずは思い出の料理づくりに取り組みました。一人が語った昔の料理をみんなで実際に作って、味わってみる。これはおもしろかったのですが、でもなかなか大変でした。

次に取り組んだのは人生双六。一人の人生の歩みを聞いて双六にまとめるんです。これもおもしろいですが、もっとみんなが参加できるようなかたちを探していました。それがカルタなんです。カルタは福祉の現場では普通にやられていますが、文章を読み終わる前に取り札を見つけて取ってしまうので、文章を楽しめないところが難点です。ここで東京・世田谷にある「ハーモニー」という就労継続支援事業所で行っている「幻聴妄想カルタ」というのがヒントになりました。統合失調症の人が自分の幻聴や妄想をカルタにして発表し合ってお互いの理解を進めようというものです。それより面白いものをつくろうというので考えたのが、先ほど参加していただいた「すまいるかるた」です。取り札の文字は冒頭のではなくて、どこの字でもいいというルールです。このカルタはそのまま「すまいるほーむ」の歴史になっています。

カルタの次は、記憶の地図づくりです。場所の記憶というのは誰にもありますね。民俗学の場合だとそれを聞き取って年代別に地図に落としていくのですが、ここの地図は年代に関係なく、１枚の地図にすべて書き込んでしまいます。記憶というのは時代に関係なく、時代を超えて記憶されています。ある場所に関して印象に残っていることを１枚の地図にまとめてみる。この地図を見ているといろんな記憶がよみがえってくるんです。

●みんながみんなを受け止める

――高齢者が豊かに持っている記憶、生活文化が介護を進める上で大切な資源になるということなんですね。他にも高齢者自身が持つ介護の資源というものはあるでしょうか。

六車：宗教儀礼というか、葬送儀礼もそうだと思います。民俗学においてはこれらは研究対象でしかなかったのですが、ここでは切実な課題です。せっかく関わって関係性ができても、やがて弱っていかれ死を迎えることになる。私もそれをどう受け止めていいかわかりませんでした。介護の現場で利用者さんの死をどう乗り越えていくのかという研修を受けました。ケア・マネージャーさんにどうしたらいいかわからないと質問したら「私もつらいけど利用者の前では泣かない、風呂に入って泣く」というお答え。でも、悲しいのにどうして泣いてはいけないのか―他のメンバーを混乱させるからだというのですが、でも何かおかしい。

聞き書きに協力的な方が亡くなられたとき、そのことを隠さないという原則を立て、お別れ会をしましょうということになりました。みんなが亡くなられた方の思い出話をしあいました。するとある方が「亡くなった〇〇さん、今ここに来ているよね」と言われた。その感覚がすーっと心に入りました。亡くなった方について語り合うことで悲しみを共有できる場になっている。これはこの地域の感覚であり文化だと思いました。死を共有してきた文化ですね。「すまいるほーむ」ではお別れ会で使った、亡くなられた方の写真をみんな掲示しているんですよ。「ほーむ」の守り神になってもらっているわけです。これは利用者さんのためでもありスタッフのためでもあります。すべてのことを共有することで、気持ちも楽になっていきます。ここの離職率が低いのは、そういう点でも居心地がいいからだと思っています。

――みんながどういう最期を迎えるのかを経験いくことで、一人一人が大事にされているという文化が育っていくのですね。

六車：沼津の狩野川で毎年やっている灯籠流しという大きな行事があります。その前に七夕まつりがあって、灯籠に亡くなった方の名前を書いて、どんな方だったのかを話しながら共有します。夜の灯籠流しには行きたい方を連れて一緒に行きます。自分が亡くなったらこういう風にしてくれるということがわかります。伝統的な葬送儀礼によって自分が死んだ後のことを想像することに意味があるんですね。こういう風に供養されると安心だなと誰もが思うことができます。

――その施設固有の文化をつくっていくことが大切だということですね。「すまいる」の文化を一言で言えばどういうことになりますか。

六車： 誰も否定しない、みんなが受け止めてくれるという感覚、雰囲気があるということでしょう。普段の関わりの中でも、認知症の方が徘徊しても、みんなで受け入れている。自分がそうなったとしても、ここなら大丈夫かなと思ってもらえる。自分がどうなっても安心できる場をつくることが福祉なのだと思います。

これは精神医療の場で療法のひとつとして行われている開かれた対話、オープンダイアログに似ています。フィンランドで開発されたのですが、統合失調症を抱えた人が大変な状況になっているとして、そこに、夫や妻や子どもや友人や医療者や福祉関係者などの専門家がチームを作って出向き、みんなでオープンに対話をする。どんな話をしてもいい。本人の話も否定せずに聞く。本人のいないところでは、絶対に本人の話はしない。そういうやり方で対話を何度も繰り返すことで、安定した状況になっていくのです。有名な「べてるの家」で行われている「当事者研究」もオープンダイアログと言えるでしょう。その高齢者版が「すまいるほーむ」だと言ってもいいと思っています。こういうやり方がいま社会に求められているのだと思います。認知症にしても、当事者の方が相談室を開いていて、そこに認知症の方々が訪ねて来るというやり方うまく行っている例があります。認知症の当事者研究ですね。

●遊びをどうとらえるか

――新しいご本（『介護民俗学へようこそ』新潮社　2015年）の中で「遊ぶということが認知症の人たちと、人として向きあうための一つの希望となる」と述べられておられますが、その遊びとはどんなものでしょうか？

六車：イメージとしては「神遊び」ですね。沖縄などでは神さまとの関わりは「遊び」として捉えられています。それも自分だけが神さまと関わるのではなく、神をみんなで共有する、その手段が遊びなのですね。みんなで共有していくから楽しい。その中でお互いを認め合う、助け合う。そんな遊びが大切だと思うんです。

――いのちの元から出てくる。開かれた遊びということですね。実のところ、介護の現場では「レクリエーション」としていろいろな遊びが行われてきました。しかし、それは半ば強制的された遊びで、手段化されてしまっている…

六車：毎日のことですから、塗り絵にしても折り紙にしてもカラオケにしても、プログラムとしては必要です。ただそれを関係性ができていないところでやったら、残酷ですよね。でも関係性が出来上がった中では許し合える。同じことをやっているように見えても、その意味は全く違ってくると思います。私自身、歌は苦手だったんです。でも歌好きの利用者さんが来て一緒に歌ったら楽しかった。みんなに受け入れてもらったのが嬉しかったんです。

――レクリエーションもまた、関係性という視点から見直してみることが重要なのですね。私たちも豊かな関係性を育てる遊びというものを追求していきたいと思います。

**３　高齢社会と福祉文化研究の課題**

六車氏は2015年に刊行された『介護民俗学へようこそ』（新潮社）の中で、「すまいるほーむ」の実践を紹介し「聞き書き」という方法がもたらす「沃野」を多彩に描いている。同書の終章では、現在の福祉現場に関わる根本的な問題提起がなされ、それらはいずれも「文化の視点から福祉の現実を批判的に考察する」私たちの福祉文化研究にとって見逃すことのできない「問題集」になっている。

　六車氏はまず「介護現場での利用者本人からの意見、評価の少なさ」を問題にする。高齢者は援助者側からの一方的なサービスを受け取るばかりで、その内容に対して要望や注文を言う機会が保証されていない。本来主人公であるべき高齢者が「非主体化」されている、援助者主体の福祉文化を私たちは根本から考え直していくべきだろう。六車氏は、そもそも「要介護状態は軽減され改善されるべきものか」と問いかける。介護を受けることは望ましくないことだから、そこから脱して自立するために、心身を治療し、生活を改善しなければならないという発想が前提になっている。六車氏が強い違和感を抱いたのは、現場で強調される「目標」の設定ということだった。目標を掲げて高齢者を操作対象として扱っていくというのは「医療モデル」であって「福祉モデル」ではない。プログラムの実施に当たってエビデンスを示すことが強調されるのも医療文化の発想である。

根本にあるのは「老いということが価値を失い、成熟が意味を失う、老いの否定」の文化である。しかし医療がいかに発達しても死を越えることはできないだろう。医療が万能でないとすると、それとは異なる原理によって高齢期を捉え直す必要がある。高齢期という人間の生き方においては「死に向かっていかに穏やかに下っていくかが課題」だと六車氏は指摘する。そこで取り組まなければならないのは「死の文化の再構築」ということだろう。先人たちは死を受け入れ、死と和解するために、宗教に始まり芸術から死の作法に至る多様な文化様式を作り上げて来た。それらを探索・再考・復興するとともに、老いや死を単に個人の問題に閉じ込めるのではなく「要介護状態の人もそうでない人も互いに支え合って地域社会を形作っていく」ことを目指したい。それこそが今日の福祉文化研究に課せられたミッションなのである。

〈インタビューのまとめに当たって馬場清氏の協力を得たことを付記します。〉

　　　　　　　　　　　　　　　　　（そのだ　せきや　法政大学大原社会問題研究所）